

第1章

グローバルレベルの農水産品・食料・肥料貿易 途上国農業のグローバリゼーションは本当に進んでいるのか

重富 真一

要約：グローバリゼーションが途上国農村にどの程度浸透しているのかを推測するため、生産物や投入財の貿易の動きを検討した。全体としては、グローバル化は途上国よりは先進国で顕著な現象であり、またグローバルレベルよりもリージョナルレベルの貿易の拡大がよりはっきりと見て取れる。ただし途上国でも、食品の貿易額は増加傾向にあるし、1980年代後半からそれが顕著になった地域もある。また地域外との取引が増大しているところも部分的には見られた。

キーワード：グローバリゼーション 農業 統計 一次産品 貿易

はじめに

「グローバリゼーション」「グローバル化」という言葉が、日常的にも使われるようになって久しい。農産物の輸入大国日本に住む我々は、日々口にするものの多くが、海の方こうから来たことを知っている。そこには途上国も含まれるから、発展途上国においても農業のグローバリゼーションは進んでいるに違いないと思う。本章はそうした「感触」が証明されるのかを、貿易統計によって検討するものである。

同様の問題意識から、すでに Aksoy (2005)が統計分析をおこなっている。そこで Aksoy は、1980年代以降について、もっぱら先進国との比較から、途上国をその開発レベルに分けて、検討している。また品目をグループ化して、動向を見ている点も特徴である。しかし、1980年以前（「グローバリゼーション」が叫ばれる以前）との比較ができないこと、国内の生産や消費に対する貿易の比重がわからないこと、途上国独自の

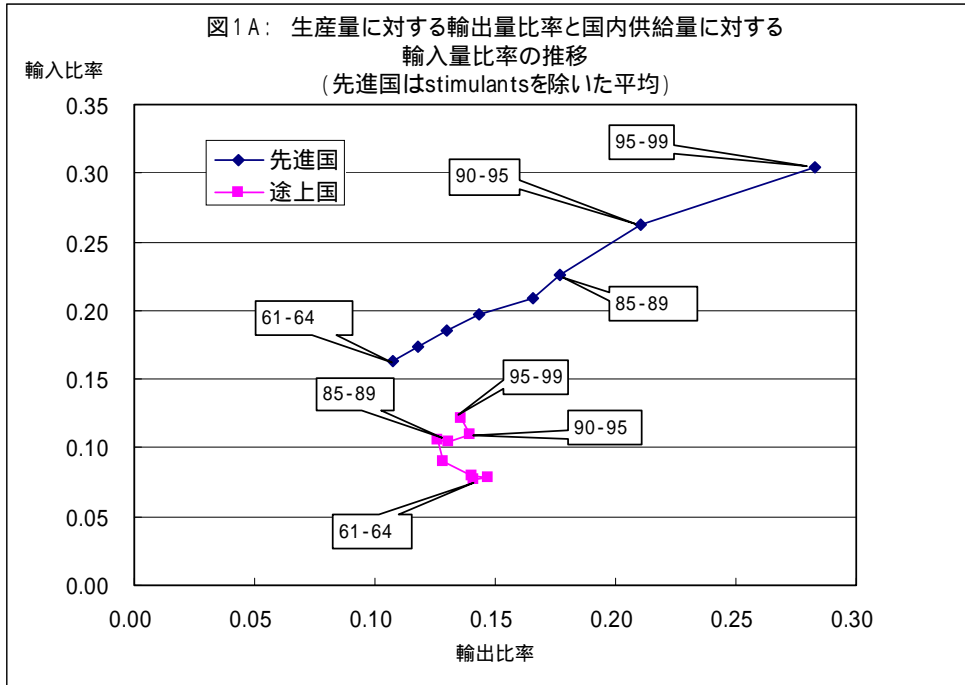
動き、とくに地域別の動きが見えないこと、などの不満がある。そこで本章では、1960年代から今日までをカバーして、途上国の農産物貿易がどのように変わってきているのかを、貿易依存度（第1節）、貿易の流れ（第2節）、品目の特色（第3節）についてみていく。投入財については肥料の貿易依存度のみ検討する（第4節）。なお本章の統計データは、国連食糧農業機関（FAO）のFAOSTATと国連貿易統計（UN Comtrade）という、ウェブ上に供された二つのデータベースに依拠している。

1．農水産品の貿易依存度は高まっているのか

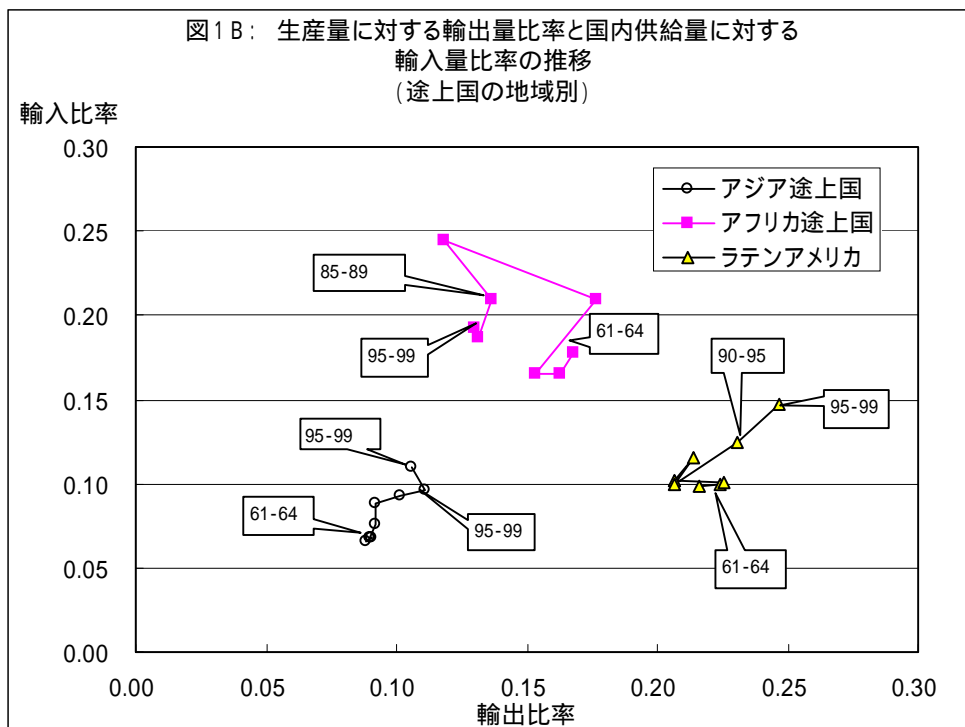
まず、FAOSTATを用いて、農水産物の輸出が生産量に対して、また輸入が供給量に対してどのような比率で推移してきたかを見よう（以下、それぞれ「輸出比率」、「輸入比率」と呼ぶ）。FAOSTATにはFood Balance Sheetsと呼ばれるデータベースがあり、農水産物の種類別¹に生産、輸出、輸入、国内供給の量を国ごとに表示することができる。また地域や経済開発水準によって、国別のデータを合計したものが国グループとして用意されている。そこでそのようなグループ別に1961年から1999年までを5年おき（1961-64年のみ4年）に区切って、農水産物種類ごとに輸出比率、輸入比率の期間平均を出した。さらにそれを単純平均して、期間ごとの農水産物全体の輸出比率、輸入比率とした²。図1Aは、横軸に輸出比率、縦軸に輸入比率をとり、「先進国」と「発展途上国」というグループごとに、期間ごとの値を時系列で結んだものである。図を見やすくするため、重要な点にのみ該当期間ラベルをつけてある（例えば“61-64”は1961-64年の意）。なお先進国についてはstimulants（刺激性飲料：コーヒー、ココア、紅茶のこと）の輸出比率、輸入比率（特に前者）が飛び抜けて高いため、これを除外して平均した。

先進国と途上国で、比率の推移は対照的である。先進国は、1961-64年以後、持続的に輸出比率、輸入比率ともに増加させてきた。とくに1985-89年からは、明らかにその増加幅が大きくなっている。「グローバル化」なる言葉が人口に膾炙し始めた時期から、確かに先進国の農産物貿易はその生産量・供給量に比べて比重を増していったのだった。

ところが途上国はどうか。先進国と同じ座標軸に載せると、その動きはじつに緩慢である。とりわけ輸出比率は1961-64年当時に比べ1995-99年の方が低くなっている。輸入比率は増加しているから、途上国はこの間に輸出よりも輸入面でより世界市場に包摂



出所) FAOSTAT, Food Balance Sheets



出所) FAOSTAT, Food Balance Sheets

されるようになったのである。

この途上国の部分だけを、本書の対象国が含まれるアジア、アフリカ、ラテンアメリカの3地域にわけてみたのが、図1のBである。一口に途上国といっても、これら3地域の動きはずいぶん異なっている。まず「アジア途上国」(日本とイスラエルを除くアジア地域)であるが、他の2地域に比べ輸出比率、輸入比率の絶対値が低い。相対的に自給的な構造をもっているといえよう。しかし輸出比率、輸入比率とも、伸び幅は小さいものの、徐々に拡大してきた。「アフリカ途上国」(南アフリカを除くアフリカ地域)は、他の2地域に比べ輸入比率の高さが顕著である。1980年代までは輸出比率を上げることなく、輸入比率のみが上がり、最近の20年は輸入比率も下落に転じた。グローバリゼーションが予想するような変化とは逆の変化が起きている。「ラテンアメリカ」(Food Balance Sheets 中、「ラテンアメリカ及びカリブ諸国」と表示されているグループ)は、もともと輸出比率が高く、1980年代後半以降は輸出比率、輸入比率ともに大きく増加させた。こうしてみると、グローバリゼーションが過去十数年で進んでいると曲がりなりにもいえるのは、途上国ではラテンアメリカだけである。

以上のように、貿易依存度という観点で見れば、グローバリゼーションはきわめて先進国的な現象といえる。

2. どこからどこへ

次に、農水産品がどこからどこへ流れているのかを見てみよう。FAOSTATでは穀物以外の輸出入先を区別できないので、UN Comtradeのデータを用いた。ここで扱った品目は、SITC改訂第1版(SITC-R1)による分類で、食料および家畜(Food & Live Animals、コード番号0)とされたものである。ここではIMFの『国際金融統計年報』(*International Financial Statistics Yearbook*)にある一次産品価格指数(Commodity Price Index)表中、食料(Food)の値を用いた。ただし1960年代から2000年までをカバーするデータシリーズはないので、1995年基準のシリーズに1980年を基準とするシリーズを1971年でつなげた。

なおUN Comtradeのデータには、国によってデータの無い年があるから、それらを地域ごとに合計して時系列比較をすると、データの有無が額の増減に反映している可能性がある³。そこで年次ごとにデータのとれた国数で合計値を割って、データのある1国あ

たり平均額を出した。また本節で、「途上国」とは、「アジア途上国」(日本とイスラエルを除くアジア)、「アフリカ途上国」(南アフリカを除くアフリカ)、「ラテンアメリカ」の3地域の合計であり、「先進国」とは、日本、「北米」(アメリカ合衆国とカナダ)、「EU」(EU15カ国)、「オセアニア」(オーストラリアとニュージーランド)の合計を指す。

まずアジア途上国からの輸出をみる(図2A)。先進国向けの方が途上国向けよりも多いが、その差はそれほど大きくない。しかも双方とも、1980年代後半からかなりの伸びを示してきた。途上国向けについて、3地域に分けて推移を見たのが図2Bである。一見してわかるように、アジア途上国から途上国向けの輸出増加は、アジア向けによるものである。一方、1980年代後半の先進国向けの伸びは(図2C)、日本向けによる部分が大きい。北米、西欧向けも順調に伸びているが、日本向けにははるかに及ばない。

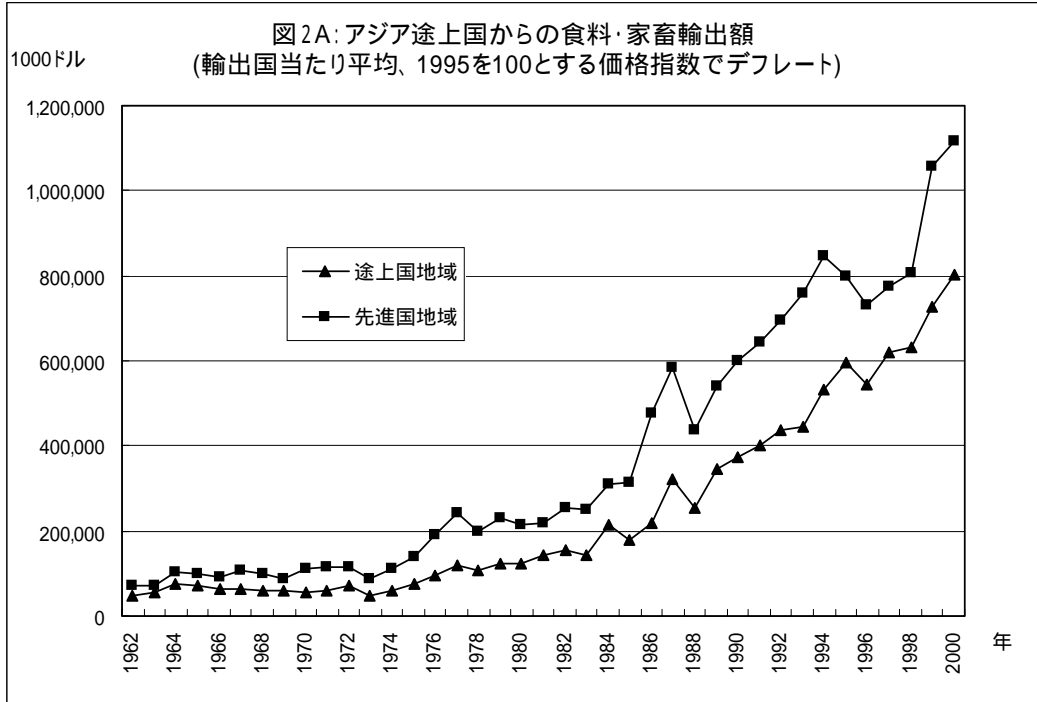
次に輸入である。図3Aにみるように、輸入は1970年代後半から増加してきた。その伸びは、1980年代後半に入ってやや加速したようだ。しかも先進国と途上国で額も伸び率もほとんど差がない。途上国からの輸入は(図3B)、やはりアジア域内からが際だっている。ラテンアメリカからの輸入も増加してきたが、アジアに遠く及ばない。先進国についてみると(図3C)、北米、オセアニアからの輸入が特に増えているようだ。

こうしてみると、アジア途上国は輸出と輸入の両面で日本を含めた域内の依存度が高いことがわかる。また1970年代後半から貿易量が増加し、さらにそれが1980年代後半になって加速している。

次はアフリカ途上国である。輸出を途上国向け、先進国向けに分けてみると(図4A)、先進国向けが圧倒的に多い。それは1970年代半ばに急増するが、1980年代は停滞し、1990年代半ばにふたたび増加する。2000年頃には、1970年代のコモディティブーム期の水準にまで回復した。途上国向けは1990年代に入って継続的に増加するようになった。なおアフリカ途上国の貿易相手国として南アフリカは重要と思われるが、UNComtradeでは2000年以降の数値しかとれないため、本稿では検討から除外している。

これを途上国について地域別に見ると(図4B)、アフリカ域内が多く、1990年代に急増している。アジア向けも同じ時期に増えてきた。先進国向けでは(図4C)、EU市場の依存度が著しく高い。他の先進国向けはほとんど増加していない。図4Aでみた「先進国向け」は、「EU向け」の動きをそのまま反映したものであった。

輸入面でも(図5A)、やはり先進国の比重が高いが、1980年代から停滞状況にあり、一方で途上国からの輸入が1990年代に増えてきたので、差は縮まった。途上国からの地

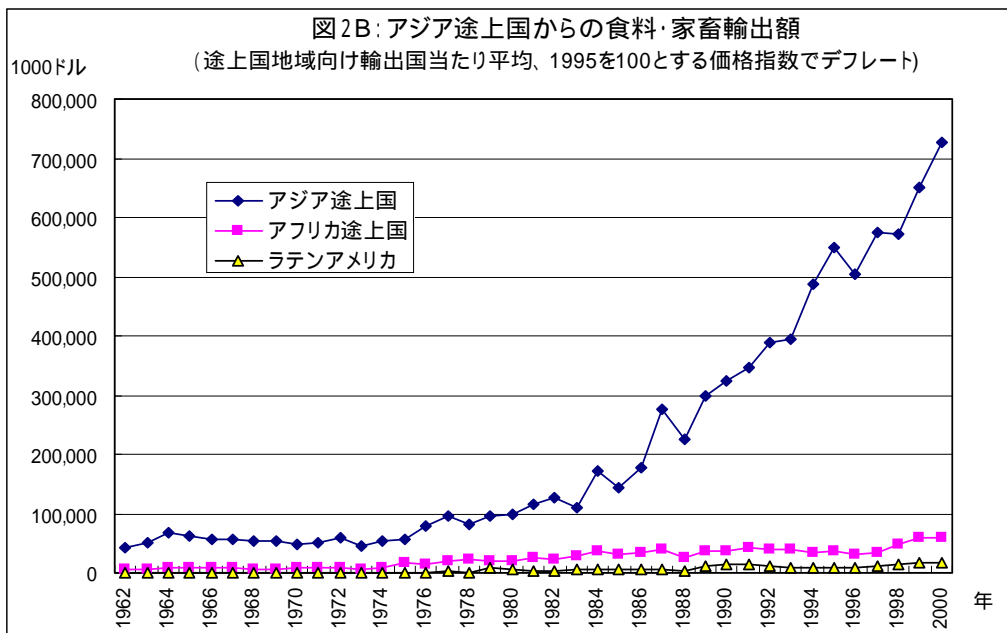


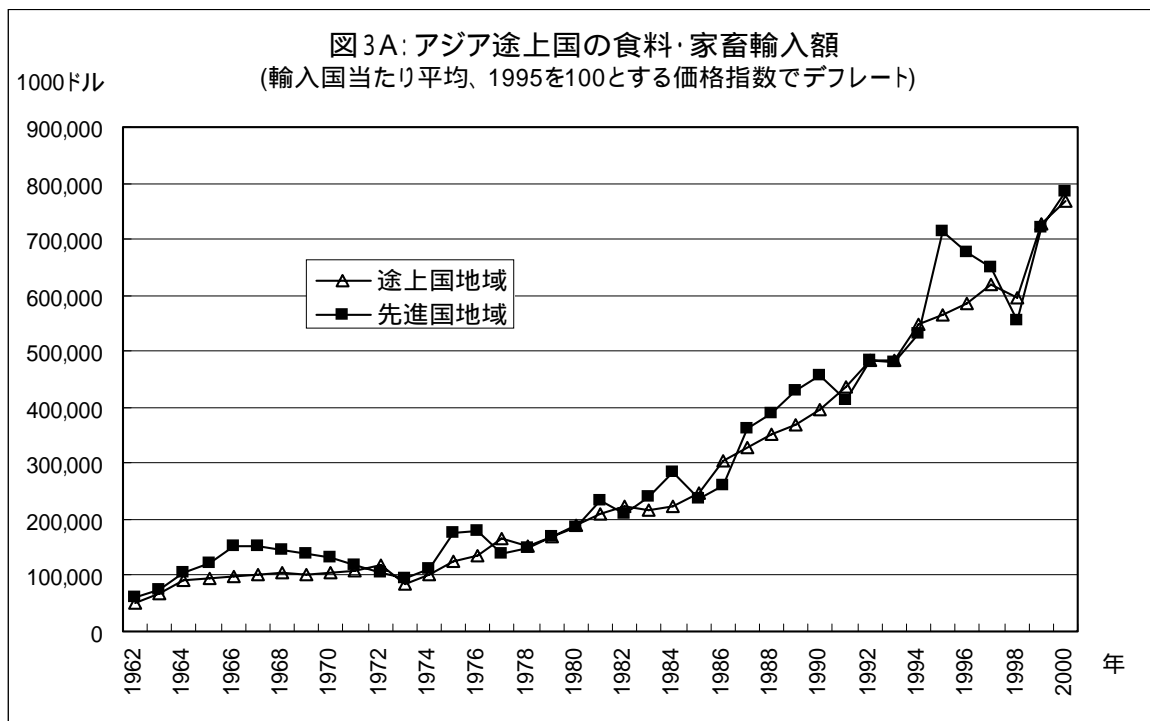
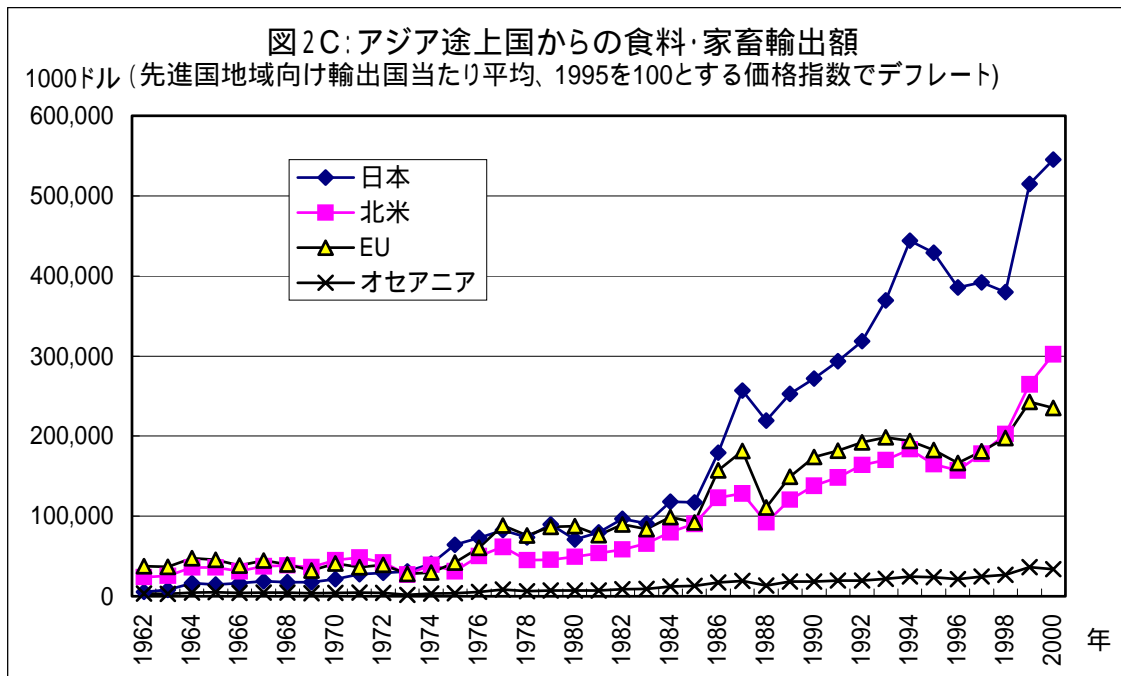
出所) 貿易額: UN Comtrade

価格指数: IMF, *International Financial Statistics Yearbook*.

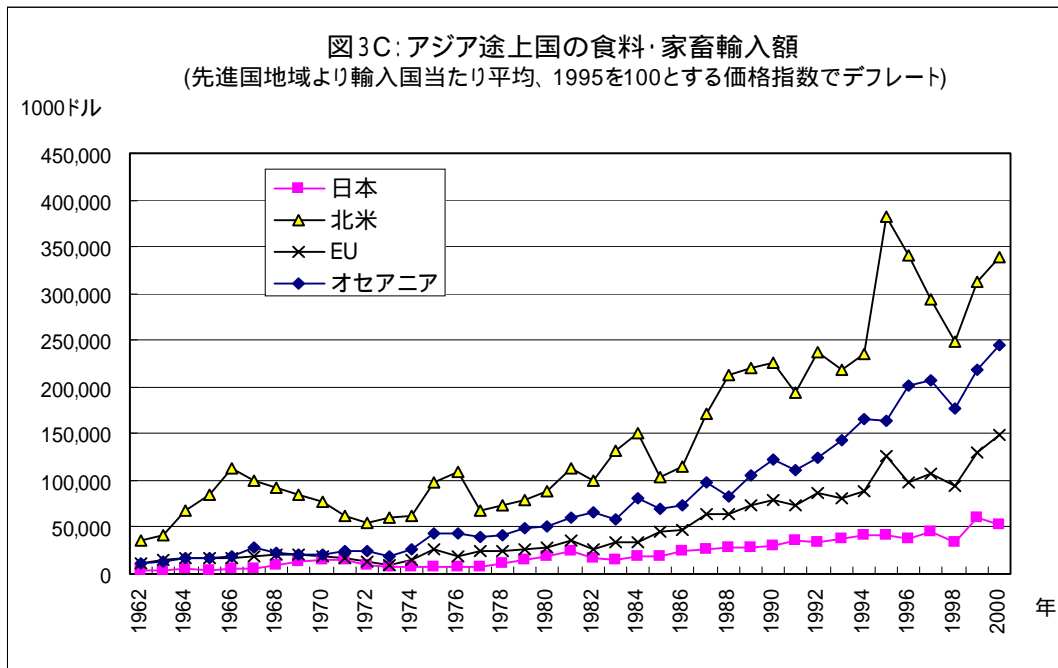
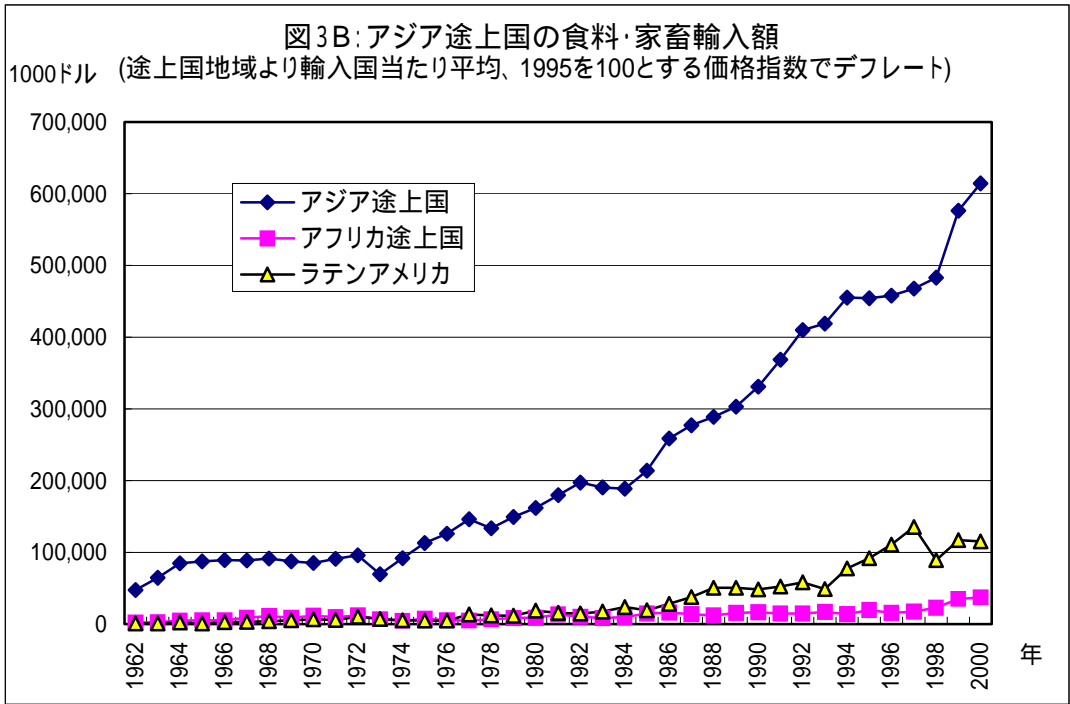
Washington, D.C.:IMF 各年版の Commodity Price Index 表にある Food の値。

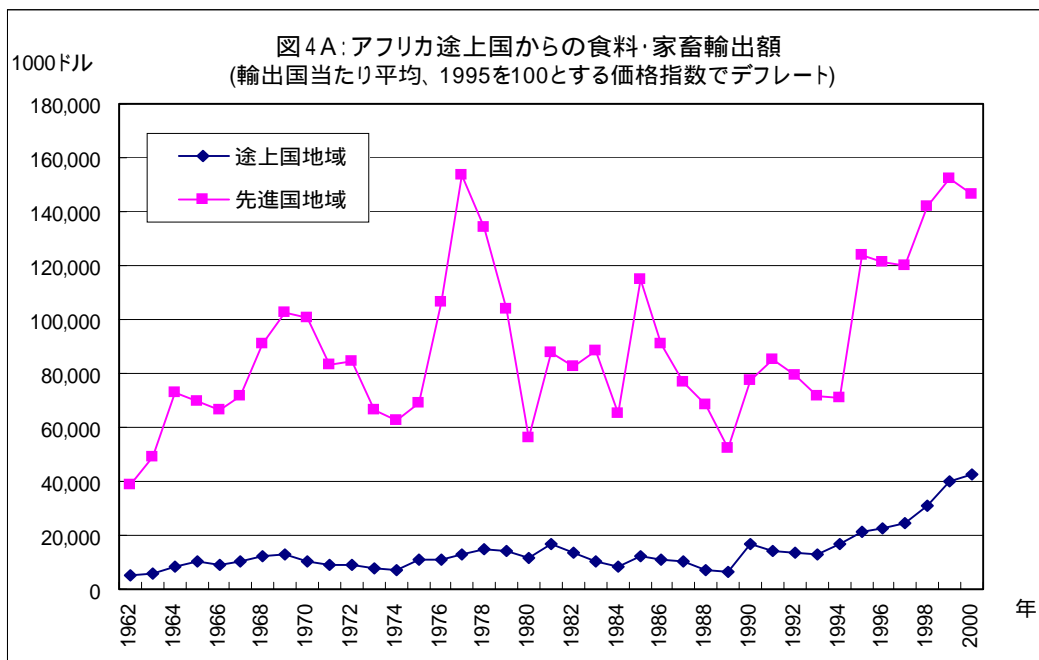
注) 価格指数は 1995 年を 100 とするシリーズ(1971-2000 年)に、1980 年を 100 とするシリーズ(1962-86 年)を比率のみ連続するように、1971 年でつなげて作成した。



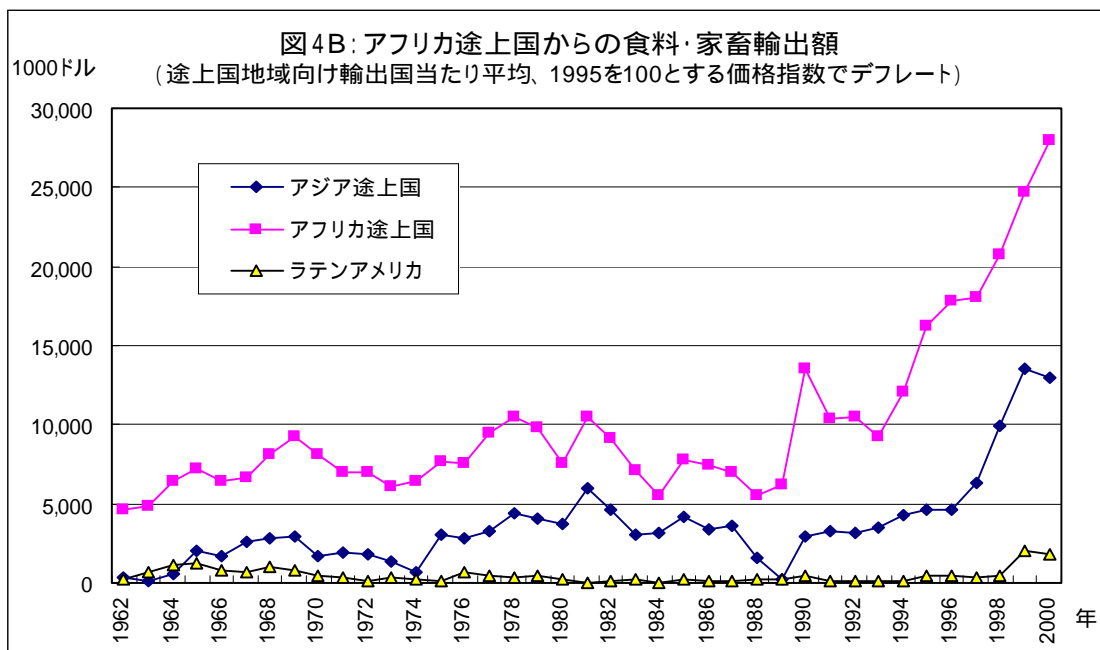


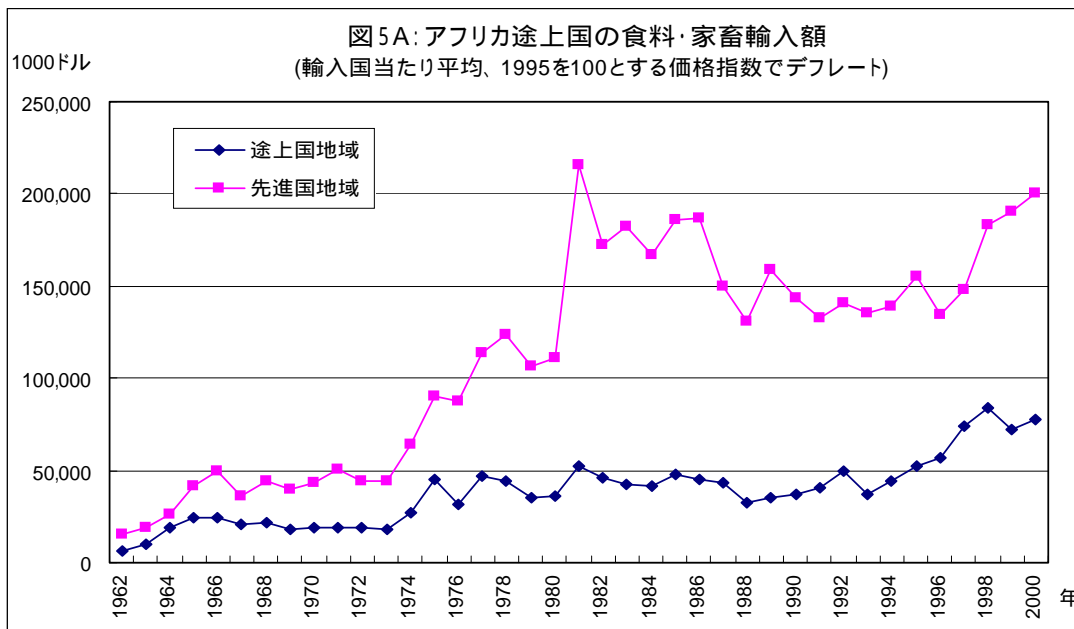
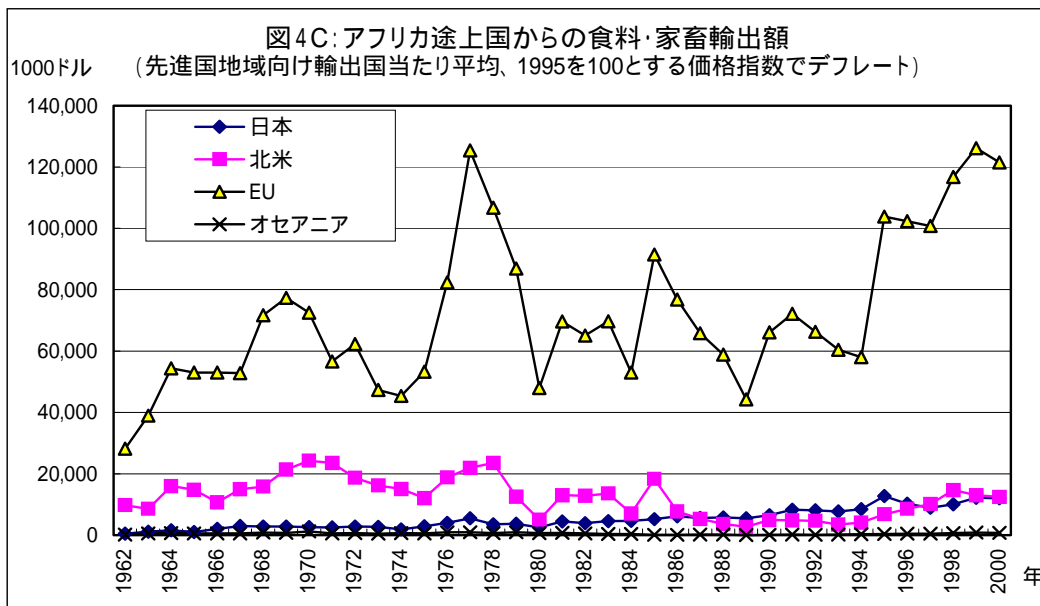
出所と注) 図 2 に同じ。



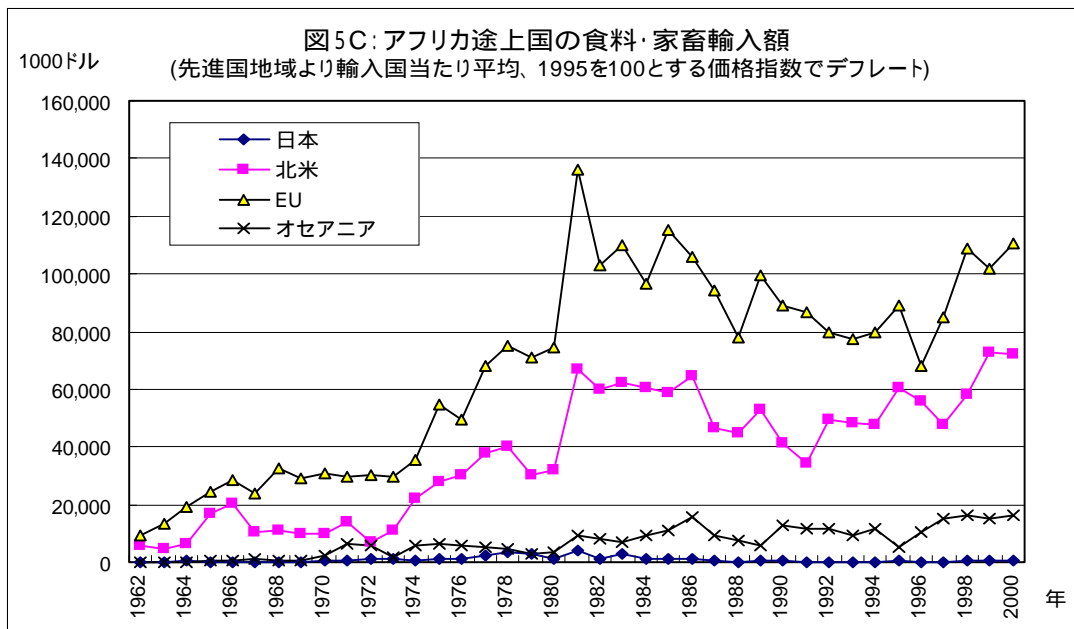
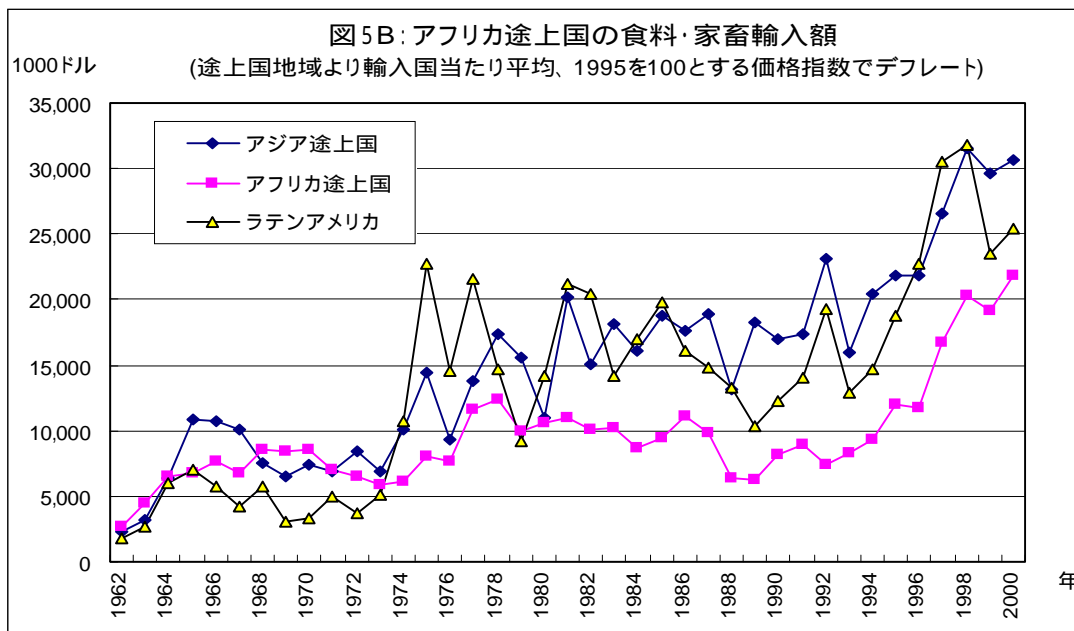


出所と注) 図2に同じ。





出所と注) 図2と同じ。



域別に見ると(図5B)、いずれの地域も1990年代になって増えてきており、しかも地域間の差はあまりない。先進国で見ると(図5C)、やはりEUからの輸入が最も多いが、北米もかなりの額になっている。輸入はこれら2地域とも1970年代に急増して、その後は停滞みである。他の2地域(日本、オセアニア)はあまり重要ではない。

このようにアフリカ途上国の農水産物輸出は、先進国、とりわけEUに依存する度合いが大きい。途上国向けの大半はアフリカ域内である。1990年代になってこれら2地域向けの輸出は増大傾向にある。これらに比べ比重はまだ小さいものの、アジア途上国向け輸出も増加している。輸入面でもEUが最大の輸入元であるが、1980年代以降、停滞的である。これに対して途上国からのそれは、とくに1990年代に入って増加しつつあり、しかも地域による偏りがあまりない。

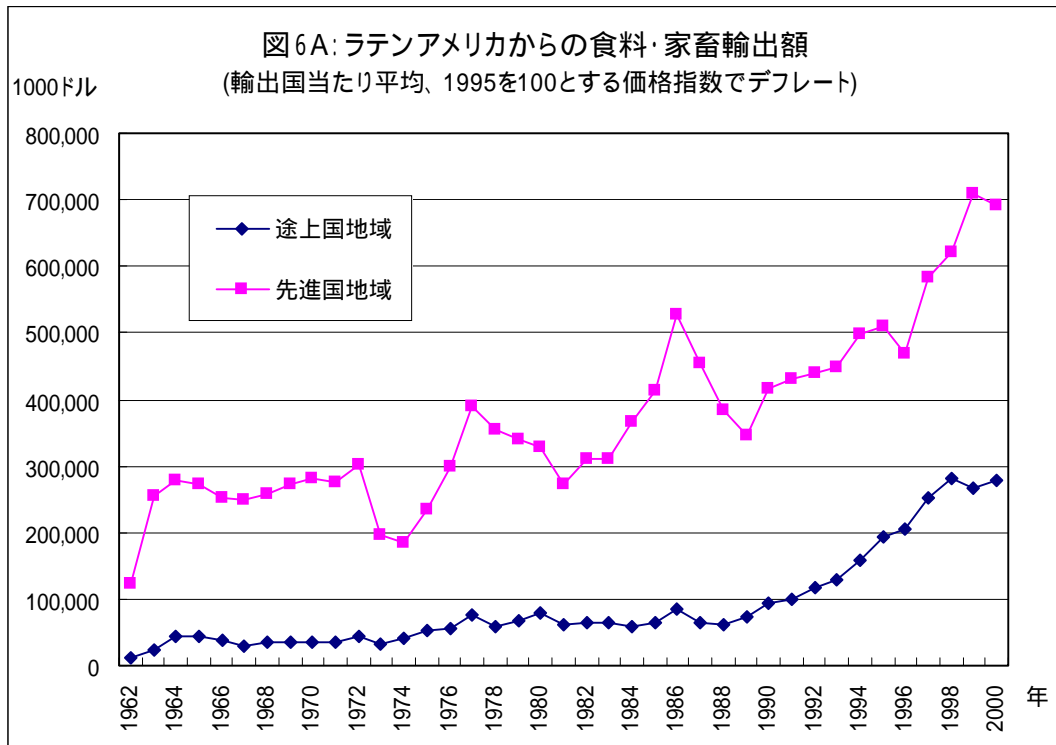
ラテンアメリカについて、まず輸出を見ると(図6A)、先進国への依存度が大きいことがわかる。1970年代のコモディティブームが去った後、1980年代前半まで停滞し、後半に再び急増と急落を経験した。1990年代以降は急速かつ持続的な伸びをみせている。先進国向けより少ないとはいえ、途上国向けも1990年代からの増加は顕著である。途上国の地域別では(図6B)、ラテンアメリカ域内向けが圧倒的で、1980年代末からの増加も急である。先進国向けでは(図6C)、北米とEUの2地域が多く、各々ほぼ同等の比重と同様の傾向を示している。

輸入も輸出同様、1970年代のコモディティブーム期の増加、1980年代の停滞を経て、1990年代に再び増加し始めた(図7A)、先進国からの方が多いが、途上国からの輸入がとりわけ1990年代以降、急速にのびているため差は縮まっている。途上国からの輸入のほとんどは、ラテンアメリカ域内からのものである(図7B)。先進国については(図7C)、北米からが圧倒的に多い。

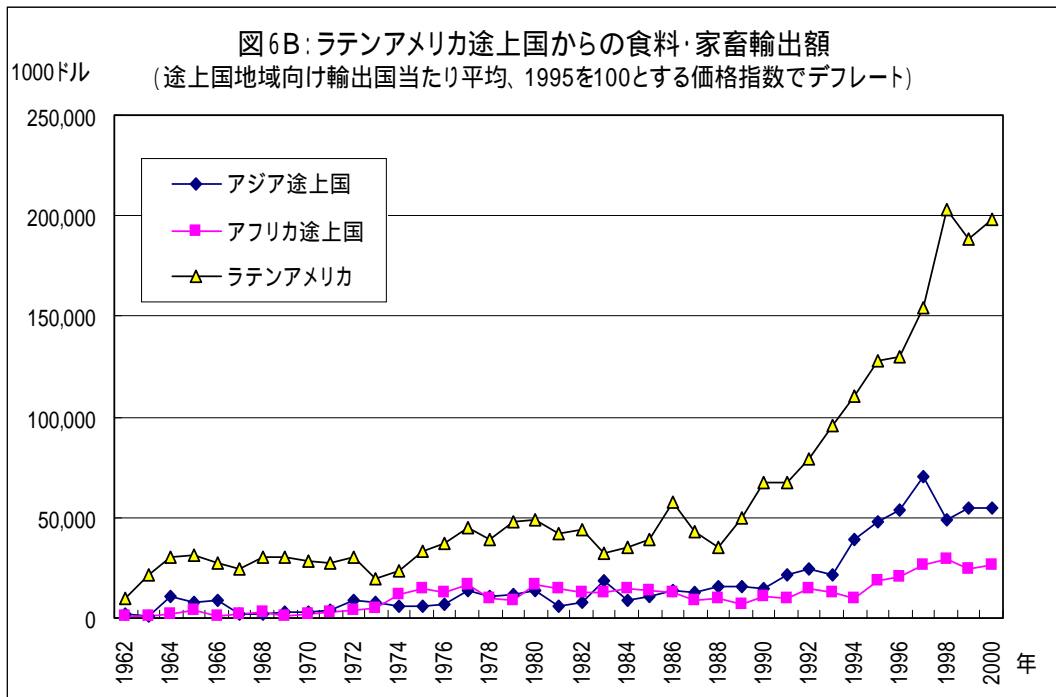
このようにラテンアメリカは、1990年代に農産物の貿易を急速に拡大している。その相手はまず北米とEUであり、次に自分の域内である。

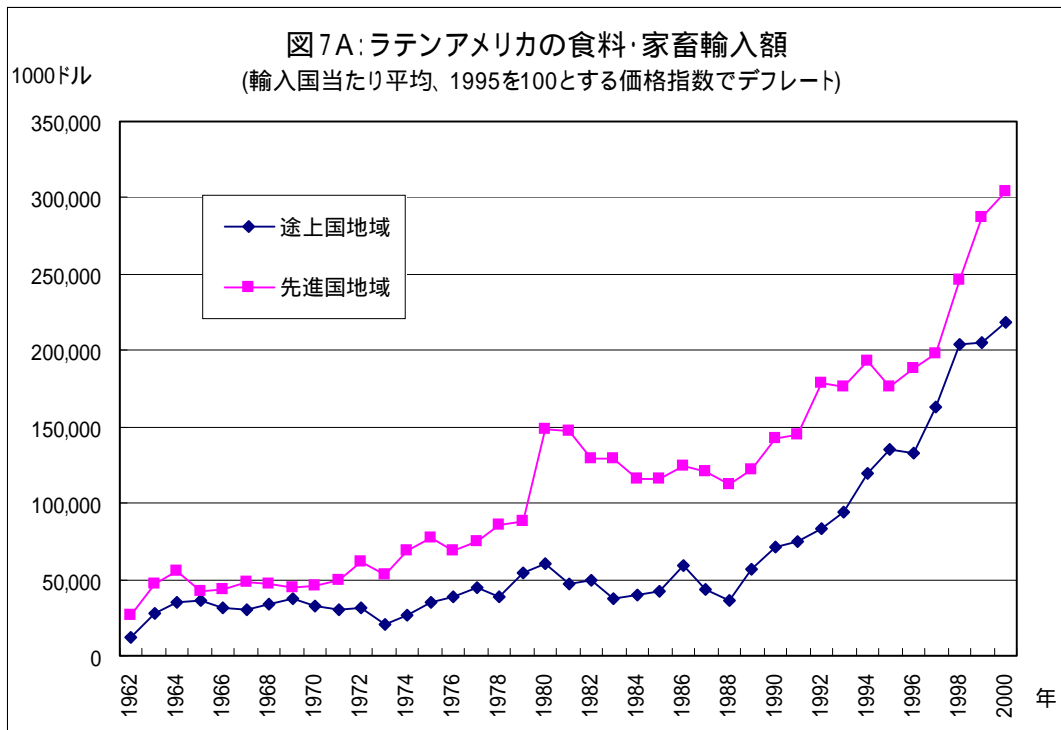
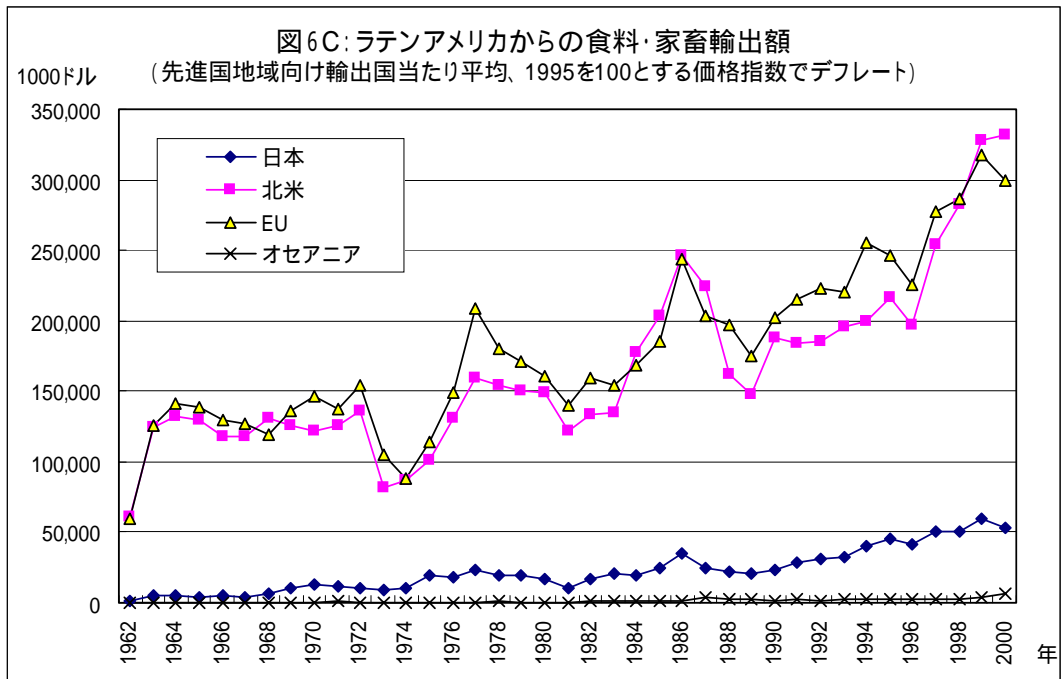
以上、「食料および畜産物」の貿易がどのようなエリア間でおこなわれているのを見てきた。途上国について言えば、その特徴を次のように要約できるだろう。

第1に、全世界に対して貿易が増加しているというよりも、むしろ同じ地域内での貿易増加が見られる場合が多かった。先進国との関係でも、アジア途上国からの輸出は日本、アフリカの輸出はEU、そしてラテンアメリカの輸出と輸入で北米が、それぞれ圧

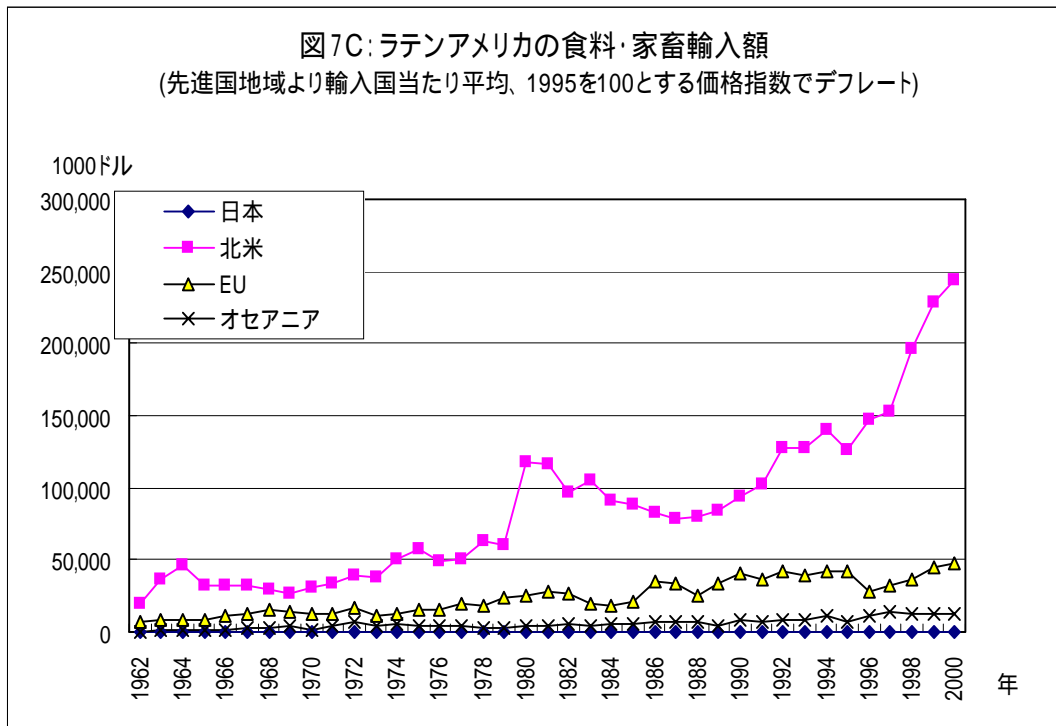
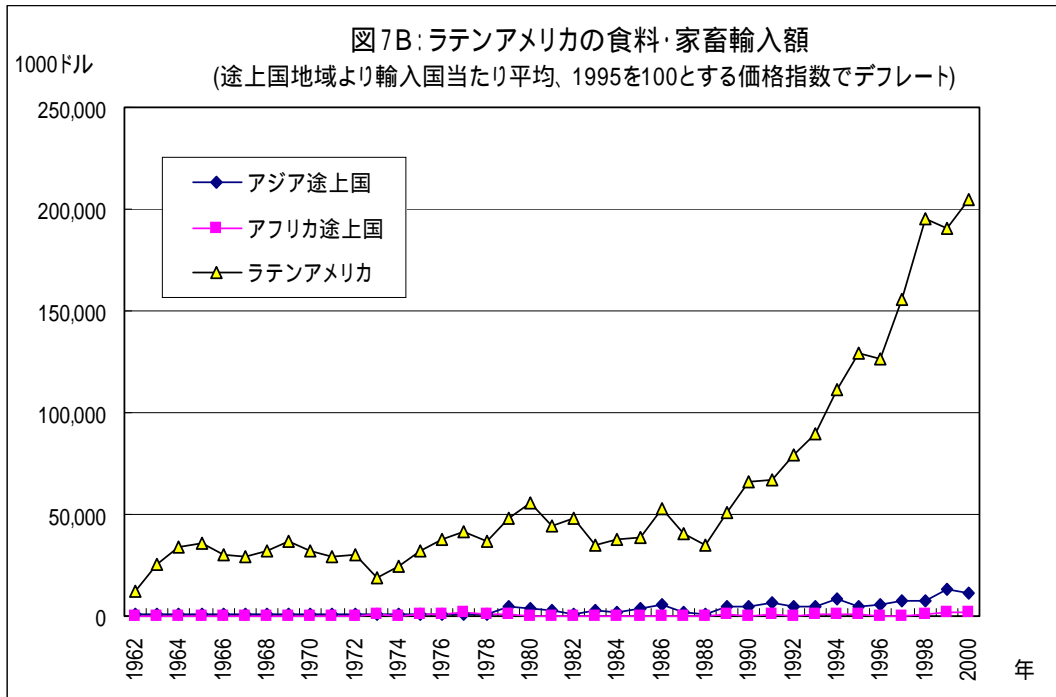


出所と注) 図2に同じ。





出所と注) 図2と同じ。



倒的な比重を占めている。もちろん、アジアが北米やオセアニアから輸入を増やしたり、アフリカでアジアからの輸入が増えたりといった新しい動きもある。しかしおおざっぱに言って、途上国の食料貿易はグローバルというよりリージョナルなレベルの方が重要なのである。

第2に、貿易相手としては、先進国の比重が大きい。それはアフリカやラテンアメリカで顕著であった。とはいえアフリカでは、近年途上国の比重が相対的に高まる傾向が見られるし、ラテンアメリカでは途上国との貿易が先進国とのそれを追いつけている。

第3に、1980年代後半から1990年代に入ってから貿易額の増大が、かなりの地域で見られた。アジア途上国について、特にアジア域内向け（日本を含む）の輸出が1980年代後半から増加する。輸入についてもこの時期から伸びが加速した。アフリカ途上国では、1990年代に入ってEUや域内向け輸出が増加し、輸入は途上国の各地域から増えている。ラテンアメリカは、1990年代の急増がはっきりみられる。貿易相手は北米、EU、そして自分の域内である。

3. 何が

貿易の流れの概要は前節の検討でわかったが、いったいどのような農水産物がより多く輸出されるようになったのだろうか。ふたたびFAOSTATのFood Balance Sheetsを用いて、輸出比率、輸入比率の変化を見てみよう。ここでは仮にグローバリゼーションが1980年代後半以降おきていると仮定して、品目種類ごとに輸出比率、輸入比率を1980-84年平均と1995-99年平均とで比べてみた⁴。以下に示す図8から図12では、横軸に1980-84年平均値、縦軸に1995-99年平均値をとった。45度線よりも上にあれば、この間に比率が増加したことを意味する。

まず先進国（図8A、B）と途上国（図9A、B）を比べてみよう。分布の様子がずいぶん違うことが一目でわかる。先進国では45度線よりも上にかなりの品目が分布している。しかも輸出比率、輸入比率の大きな品目で45度線からの乖離が大きくなる傾向があるようだ。これに対して途上国では、45度線周辺に分布する品目がほとんどである。とりわけ輸出のグラフにはそうした特色がはっきり現れている。こうした中で、輸出、輸入とも、ある程度比率が高く、かつ増加傾向の顕著なものは、treenuts(6)とvegetable oils(8)である（括弧内は図中の品目番号）。

途上国の状況を地域別に見てみよう。アジア途上国の輸出面では(図 10A) 輸出比率が大きく、その伸びも大きいものは、vegetable oils(8)と stimulants(11)である。ただし後者は 1980-84 年以前の方が輸出比率は高かったので、一時落ち込んだ輸出比率がようやく元の水準にもどったのである。輸出比率の絶対値はまだ小さいが、伸びがめざましいものに pulses(5)がある。輸入面では(図 10B) treenuts(6)、vegetable oils(8)、stimulants(11)、sugar & sweeteners(4)、fish & seafood(19)が比較的輸入比率も高く、また比率を伸ばしている。なお、輸出量は生産の数パーセントにすぎないが、伸びの著しいものもある(oilcrops(7)、pulses(5)、offals(15)など)。

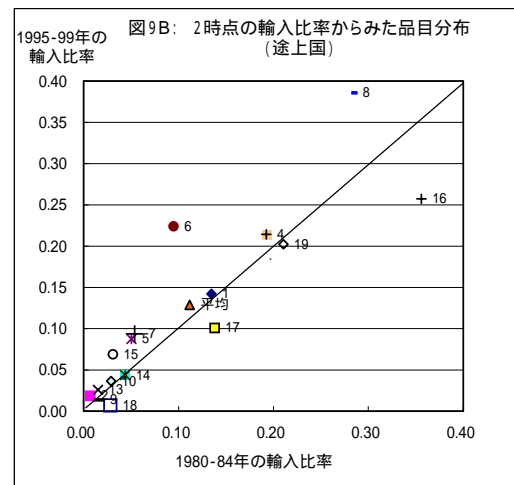
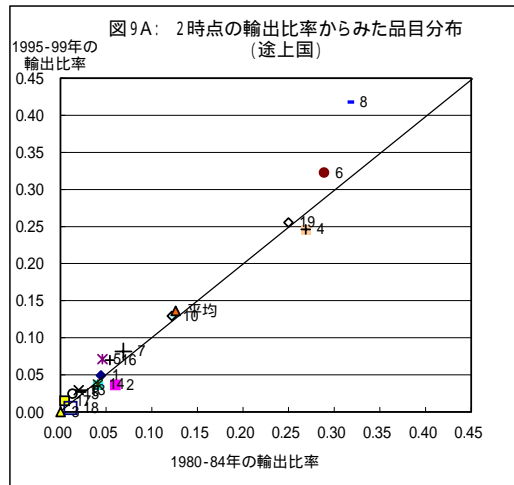
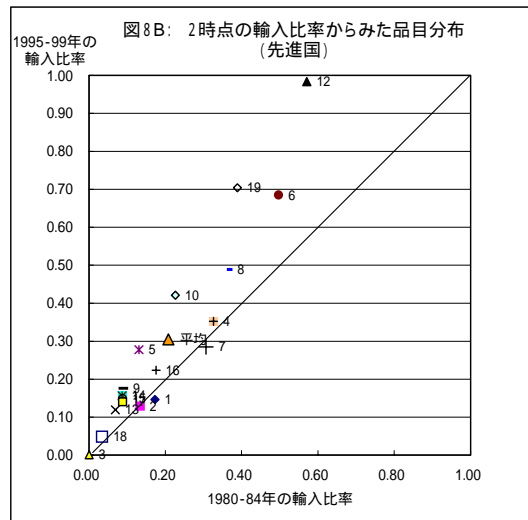
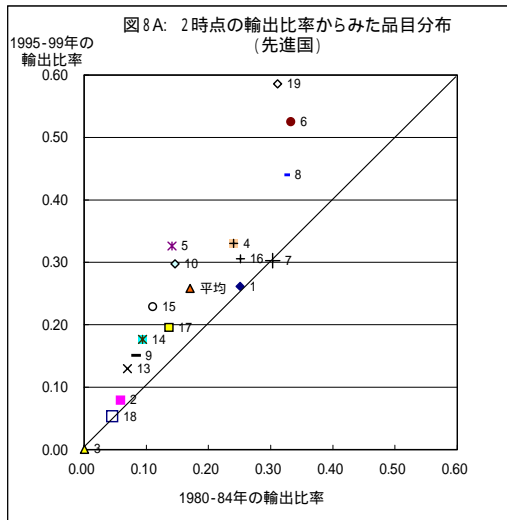
アフリカ途上国についてみると、輸出面では(図 11A) other aquatic products(20)、fish & seafood(19)、treenuts(6)といった品目が、比率もその伸び率も高い。これらはいずれも 1980 年代の落ち込みから復活したものである。輸入面では(図 11B) sugar & sweeteners 以外にほとんど 45 度線以上に位置するものがない。

ラテンアメリカはアジア、アフリカに比べれば 45 度線以上の品目が多くなる。輸出では(図 12A) fish & seafood(19)、treenuts(6)、vegetable oils(8)などが比率の絶対値もその伸びも大きい。とくに vegetable oils は持続的に輸出比率を高めてきている。注目したいのは fruits(10)や vegetables(9)で、比率の絶対値はさほど高くないが、かなり伸びている。輸入面では(図 12B) treenuts(6)、vegetable oils(8)、fish & seafood(19)などに加えて、cereals(1)のような主食を含む品目で、輸入比率が高く、しかもこの間に伸びているのも特記すべきであろう。

このように地域別に見ると、数は少ないながらも輸出あるいは輸入の比率が高く、かつ増加が顕著なものがある。treenuts、vegetable oils といった品目がグラフ上で目についた。cereals のような主食を含む品目はラテンアメリカを除くと、めだった輸入比率の増加は見られなかった。また vegetables、fruits、meat のような多くの途上国にとって新興かつ付加価値の高い品目で輸出比率を高めているのも、ラテンアメリカのみであった。

4 . 肥料の流れ

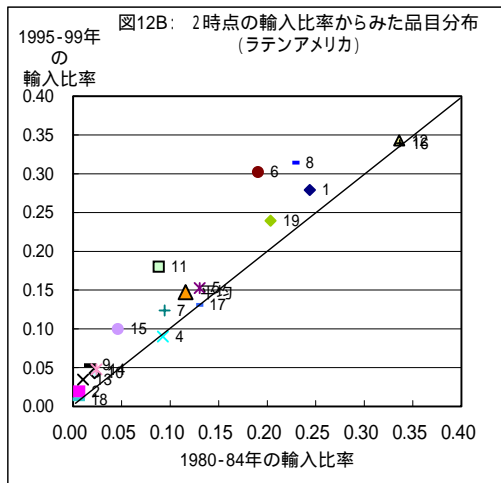
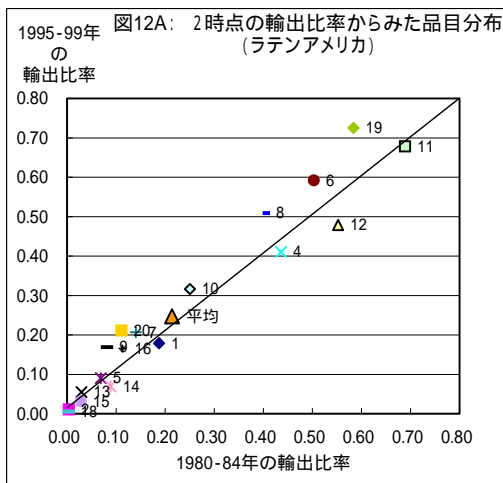
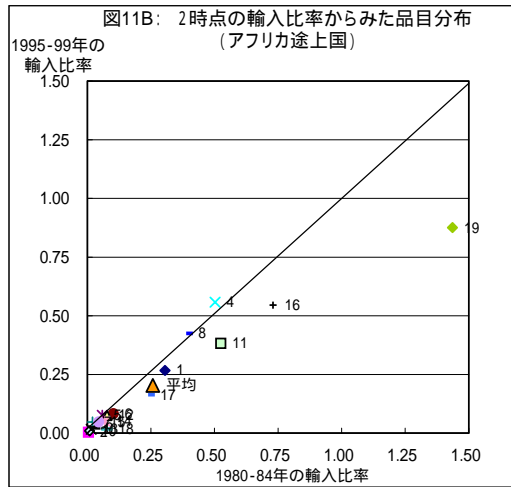
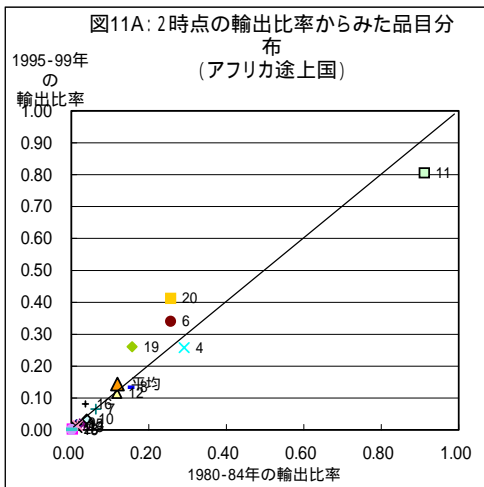
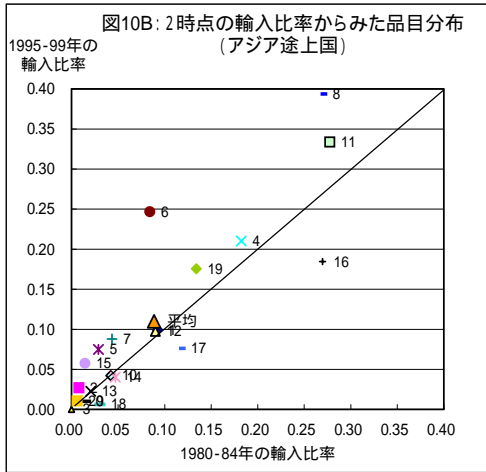
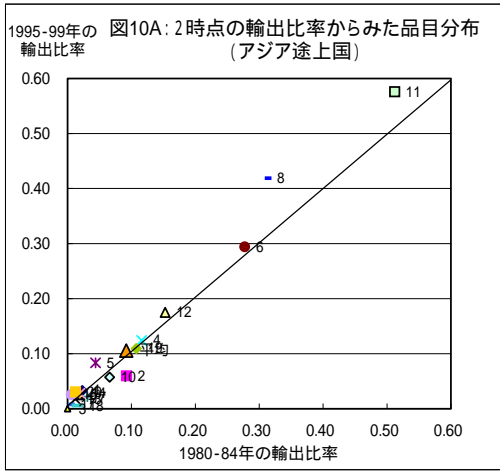
最後に、投入財のグローバリゼーションについても検討しておこう。とはいっても統計の制約から肥料についてのみ FAOSTAT から途上国の輸入比率、輸出比率をみるにとどめる。まず輸入比率(表 1)についてみると、アジア途上国、アフリカ途上国ではも



出所) いずれも FAOSTAT, Food Balance Sheets.
 注) 図中の番号は下記の品目対応表を参照。

品目番号の対応表

1 Cereals - Excluding Beer (ビールを除く穀物)	6 Treenuts (木の実類)	11 Stimulants (刺激性飲料)	16 Animal Fats (動物性油脂)
2 Starchy Roots (デンプン根菜類)	7 Oilcrops (油脂作物)	12 Spices (香辛料)	17 Milk - Excluding Butter (バターを除く乳製品)
3 Sugarcrops (砂糖作物)	8 Vegetable Oils (植物油)	13 Alcoholic Beverages (アルコール飲料)	18 Eggs (卵)
4 Sugar & Sweeteners (砂糖と甘味料)	9 Vegetables (野菜)	14 Meat (肉類)	19 Fish & Seafood (魚、水産品)
5 Pulses (豆類)	10 Fruits - Excluding Wine (ワインを除く果実)	15 Offals, Edible (食用内臓類)	20 Aquatic Products, Other (その他の水産品)



出所) いずれも FAOSTAT (Food Balance Sheets).

っとも使用量の多い窒素肥料でより自給度が高まってきているのがわかる。ラテンアメリカの場合も 1990 年代初めまで輸入比率が低下傾向にあったのだが、1990 年代に再び上昇し、2000 年の値は 1965 年よりも高くなっている。燐酸については上下するものの、やや輸入比率が高まってきているようだ。カリ成分の場合、産出場所が特定の国に限られているため、ほとんど全量を輸入に依存する状況が続いている。

以上のようにラテンアメリカでの窒素を除けば、肥料の輸入依存度が大きく高まるという状況ではない。むしろアジアやアフリカの途上国は、着実に窒素分の自給度を高めてきたといえよう。

輸出比率（表 2）の方は、計算してみたものの、そこから傾向性を読み取るのは難しい。年による値の変動が大きく、FAOSTAT のデータに何らかの問題があるか、あるいは年による変動要因が強く働く構造があるのだろう。したがってここでは計算結果だけを示すにとどめる。

表 1: 途上国地域における化学肥料の輸入比率 (国内供給量に対する輸入量の割合)
(%)

年	アジア途上国			アフリカ途上国			ラテンアメリカ		
	窒素肥料	燐酸肥料	カリ肥料	窒素肥料	燐酸肥料	カリ肥料	窒素肥料	燐酸肥料	カリ肥料
1965	46.4	24.7	119.0	69.1	37.2	106.6	61.8	57.5	99.0
1970	44.8	19.7	78.9	57.7	47.5	112.3	57.3	58.9	102.2
1975	30.0	28.2	98.6	69.9	38.2	107.7	45.8	42.5	102.2
1980	25.6	38.9	112.7	60.8	51.9	106.6	48.8	35.7	101.7
1985	23.0	40.7	105.2	47.3	54.1	118.2	32.1	30.3	107.2
1990	22.1	36.0	105.2	44.8	46.7	122.0	32.7	29.4	100.4
1995	23.6	36.0	107.5	32.8	52.8	99.8	47.3	48.0	94.5
2000	14.9	29.7	109.0	41.9	53.7	114.8	73.8	63.1	102.7

出所)FAOSTAT

表 2: 途上国地域における化学肥料の輸出比率 (生産量に対する輸出量の割合)
(%)

年	アジア途上国			アフリカ途上国			ラテンアメリカ		
	窒素肥料	燐酸肥料	カリ肥料	窒素肥料	燐酸肥料	カリ肥料	窒素肥料	燐酸肥料	カリ肥料
1965	25.0	3.3	61.0	0.0	60.5	n.p.	43.8	0.0	23.0
1970	27.6	2.0	97.1	2.8	57.0	0.0	28.0	14.4	61.2
1975	12.9	2.6	55.5	2.0	29.5	0.0	11.2	1.2	73.2
1980	11.2	9.1	91.7	8.2	54.0	n.p.	12.8	2.2	78.3
1985	9.4	15.2	100.0	29.4	66.9	n.p.	11.2	1.1	257.9
1990	9.3	10.5	100.4	43.1	78.1	n.p.	23.6	5.5	65.3
1995	10.6	10.3	100.4	42.3	79.0	n.p.	36.6	17.5	47.2
2000	11.5	8.6	106.3	49.4	85.8	n.p.	27.1	17.1	42.5

出所)FAOSTAT

注)n.p.は生産量のデータなし。

5. まとめ

以上の貿易統計分析から、次のような事実がわかった。

- ・ 1980年代後半から見られる農水産物輸出比率、輸入比率の伸びは、先進国に顕著な現象である。
- ・ 途上国の中でも輸出比率、輸入比率の動きは地域（アジア、アフリカ、ラテンアメリカ）によって特色がみられた。
- ・ 先進国に遠く及ばないまでも、ラテンアメリカでは1980年代後半以降の輸出比率、輸入比率の顕著な伸びが見られた。アジアも伸びているが、とくにこの十数年で急伸したわけではないし、その絶対値は3地域中、もっとも低い。アフリカに至っては近年むしろ数値の低下すらみられた。
- ・ ただし貿易額の絶対値でみると、1980年代後半や1990年代に入って、伸びがみられる。
- ・ 貿易の流れは、一気にグローバルな広がりをみせるというよりも、地域内やこれまでも関係の深かった近隣地域との貿易が拡大する傾向をみせている。とはいえ、新たな地域が貿易相手として登場しているという事実も一部にみられた。
- ・ 品目別にみると、途上国の場合、輸出比率、輸入比率の絶対値が高く、かつ伸び率が高いという品目はあまりなかった。あえて挙げれば、vegetable oils、treenuts、fish & seafood である。
- ・ 化学肥料についてみると、途上国で輸入依存度が急に高まっているという状況ではない。ただしラテンアメリカの窒素肥料については他とは異なった動きがみられた。

途上国の食料貿易額は、確かにこの十数年で増大をしているから、その限りではグローバル化が進んでいるように見える。しかし農水産物の貿易依存度は、先進国に比べまだ小さく、ラテンアメリカを除くと過去十数年で顕著な伸びを示しているわけではない。また貿易の流れをみても、グローバルというよりはリージョナルなレベルの関係が重要になっている。途上国農業の「グローバル化」が進んでいるか否かは、貿易の変化に限ってみても、何を指標とするかによって判断がわかれるのである。

¹ Food Balance Sheets は農水産物を種類ごとにある程度まとめた値が示されている。ここでは個別品目ではなく、このまとめた数値を用いた。その「種類」とは Cereals (excluding beer), Starchy roots, Sugarcrops, Sugar & sweeteners, Pulses, Treenuts, Oilcrops, Vegetable oils, Vegetables, Fruits (excluding wine), Stimulants, Spices, Alcoholic beverages, Meat, Offals (edible), Animal fats, Milk (excluding butter), Eggs, Fish & seafood, Other aquatic products である。

² 輸入については Other aquatic products の国内供給量の数値が示されていないため、この品目を除いた平均をとった。

³ 例えば A 国については 1980 年からしか輸出データがないとすると、1980 年の A 国を含む地域（例えばアジア途上国など）の輸出量変化には、A 国のデータが加わった影響が出る。それは A 国での輸出量の時系列変化を反映したものではない。

⁴ ここでいう「品目種類」は、前記注 1 に示したものと同じである。また輸出比率、輸入比率ともに各品目の単純平均も出して、図中に示した。ただしここでも輸入比率の平均は、注 2 で述べた理由から Other aquatic products を除いている。

(引用文献)

Aksoy, M. Ataman (2005), "The evolution of agricultural trade flows," in M. Ataman Aksoy and John C. Beghin (eds.), *Global Agricultural Trade and Developing Countries*. Washington, D.C.: The World Bank, pp.17-35.